

明日はどっちだ

伊藤 宗親

このタイトルを見て、「あ」と思った方は確実に昭和世代ですね。これは、「あしたのジョー」[原作：高森朝雄（梶原一騎），作画：ちばてつや]という漫画（週刊少年マガジン[講談社]に1967-1973まで連載されたボクシング漫画）およびそのアニメ化作品の中で、よく用いられたフレーズ（特にアニメの次回予告で）です。最近、映像をきれいにしたものを放映していて、久しぶりに毎回楽しみに見えています。それを見ていると「ああ、昔はこういう感覚が当たり前だったなあ」といったノスタルジーを呼び起こされますが、昔は昔で、今ほど便利ではなく、かといって悲惨だったかといえばそうでもなく、今はない制限に縛られつつもそれなりによい思い出もたくさんあったような気がします。

今回の原稿の内容を考えあぐねていると、このフレーズが頭をよぎるので『もうこれにしよう』という風に決めてしまいました。取り上げようと思ったのは、このフレーズが絶妙だからです。「どっちだ」という質問形は、右か左かのような選択肢の中から答えを選ばせるニュアンスがありますね（通常は二択で使います）。「どこだ」ではないので。でも、実質的には、というか意味的には「明日」という主語に明確な方向性はないので「どこだ」でも「どんなだ」でも何でもいわけです。つまり、選択肢らしい尋ね方なので、わかっている前提があるようでいて、実際には何もわからないという不思議な疑問文です。でも、なんとなく強制選択のニュアンスがあります。「選べよ」と。「どっちだ」に対しては「こっち」「あっち」などの回答の可能性がありますね。この、天に質問してるかのように、聞いた人間には強制力を持たせているという点で、絶妙というか、これが昭和だったな、と思うわけです。

昭和の感じがどうかは別として、主語が抽象的というのがありますが、尋ね方という点では実に興味深

いのです。カウンセリングの初学者は、必ずといっていいほど、オープンクエスチョンで尋ねるのがよいと学びます。話し手の体験世界をこちらが勝手に決めつけないために必要な、重要な態度です。つまり、あれかこれかを選択させる形で問うのではなく回答を制限しない問い方です。しかし、幼い子や知的に遅れていたり自我の弱い人などは、この種の問いに答えるのが苦手です。無論それでも温かな雰囲気を作りゆっくりと待つということも大切ですが、相手の心理的負担を考えれば、選択できる形の問いの方がよい場合もあると思います。その判断は難しいところですね。でも、相手の立場に立つ、というスタンスで考えていくのであれば、金科玉条のようにオープンクエスチョンにこだわるのはどうかな、と思うのです。クローズドクエスチョンを勧めているではありません。状況によって、使い分けられるように、ということです。そのような意味でも、冒頭のフレーズは絶妙な感じなのです。

私たちは時代の流れの中に生きています。あしたのジョーで描かれた「昭和」に当たり前だったことが「令和」で当たり前とは限りませんし、逆もまだしかりです。でも、価値観も変わるもので、昔ダメだったことが今はよいことになった、とかその逆とか、いろいろと変化が生じますね。その変化に応じることを適応と呼びますが、その変化の意味も考えていく必要があるのではないのでしょうか。最近、よくそう思います。ニーズがあって変化するわけですから、そのニーズは何なのか、と。

アニメでは、主人公ジョーのあしたという意味で「あしたはどっちだ」と呼んでいましたが、私たちも私たちの「あしたはどっちだ」を考えないといけませんね。

（当協会研修講師）

相談員の声

相談員は今

コロナ禍前の桜のお話。

今年の桜は、なんだかパツと開かないで咲きしぶりというか、満開の花と葉桜と蕾が混在して悩ましい咲き方だった。根尾の淡墨桜については、ソメイヨシノが終わってから一週間後ぐらいを見頃と勝手に決めていたのだが、新聞の開花予想を見て驚いた。地元のソメイヨシノの悩ましげな開花に先んじて満開とあるではないか。これには一瞬あたふたしてしまった。

じつは、先ごろツアーで知り合いになった神奈川の友人に、見ごろの情報を伝えて招待することになっていたからだ。彼女は、私が岐阜だと知ると「これまで3回淡墨桜見物に行ったんだけど、一度も満開の花に出会えてないの。」と語りだした。自分にも経験あるが、桜見物のツアーは外れることもままある。今回、地元の人を見つけ、内心「やった」と思ったかも知れない。私も、軽く「じゃあ今年こそぜひぜひ」と安請け合いをしていい気になっていた。

ところがとんだ自然のいたずらで、一週間から10